

『恋に恋して』『キス・オブ・ファイヤー』に続くハロルド・メイバーンのヴィーナスレコード第3弾が登場した。アルバム・タイトルは『ドント・ノー・ホワイ』。昨年ノラ・ジョーンズが大ヒットさせ、去る2月に発表された第45回グラミー賞で“最優秀楽曲賞”を獲得したジェシー・ハリス作曲のあのナンバーを、メイバーンがカバーしているのだ。スタンダード・ナンバーやジャズメン・オリジナルを主なレパートリーとするメイバーンにしては珍しい選曲、というのが第一印象である。ところが92年録音作『ザ・リーディング・マン』(DIW)ではウエイン・ショーターやウエス・モンゴメリーのナンバーに混ざって、ヴァネッサ・ウィリアムスのヒット曲「セイヴ・ザ・ベスト・フォー・ラスト」をカバーしており、メイバーンがポピュラー音楽のヒット・ナンバーにも目配りしていることは過去に実例があるのだ。

去る3月にトリオで来日し、各地のジャズ・クラブをまわったメイバーンは、日本での人気がすっかり定着した感の強いベテラン・ピアニストである。ところがミュージシャンとしてのキャリアの割りに、メイバーンには遅咲きのジャズメンとの印象がつきまとっていた。1936年3月20日にテネシー州メンフィスで生まれたハロルド・メイバーンは、フィニアス・ニューボーン Jr.をアイドルとして、ほとんど独学でピアノをマスター。54年シカゴに進出してプロ入り。58年にウォルター・パーキンスとボブ・クランショウの異色コンボ、M J T + 3に参加し、その演奏によって高い評価を得た。60年代はアート・ファーマー〜ベニー・ゴルソンのザ・ジャズテットを皮切りに、J.J.ジョンソン、ドナルド・バード、ウエス・モンゴメリー、マイルス・デイヴィス、ジョニー・グリフィンらと共演。ミュージシャンから厚い信頼を獲得した職人肌のピアニスト、とでも呼ぶべきポジションを確立してゆく。68年の初リーダー作『ア・フュー・マイルズ・フロム・メンフィス』以降、70年代初頭にかけてプレスティッジで4枚のアルバムを制作するも、それらは話題を呼ぶこともないままに終わった。70年代から80年代はもっぱらサイドマンとしての活動が中心だったこともあって、通好みの隠れ名手といった存在を守っていた。

そんな状況に変化が訪れたのは、90年代を迎えてからのこと。ピアノ・トリオものの制作に力を入れていた日本のD I Wが、メイバーンを“発掘”したのである。89年から99年の間にトリオ編成を中心として、5枚のリーダー作がレコーディングされた。それらのアルバムが世に出たことによって、日本におけるメイバーンの認識度がかなり向上したのは間違いない。91年には4人のピアニストによるフィニアス・ニューボーン追悼作『フォー・ピアノ、フォー・フィニアス』(Somethin'else)、実況録音作『100ゴールド・フィンガーズ』(All Art)の日本制作のオムニバス盤が発売されたことも重要だ。さらに追い風となったのが、エリック・アレキサンダーとの一連の共演作である。メイバーンとエリックのつき合いは、エリックがウィリアム・バターンソン大学時代にメイバーンと師弟関係にあったことにさかのぼる。卒業後、92年録音のデビュー作『ストレート・アップ』(Delmark)でこの新星をバックアップしたメイバーンは、その後もコンスタントにエリックとの共演関係を継続。97年録音作『ヘビー・ヒッターズ』(Alfa Jazz)に至って、エリックあるところにミュージカル・ブレーンのメイバーンありき、との印象を強く人々に与えたのだった。優秀な若手テナー奏者がスターダムに上った陰には、ハロルド・メイバーンという名伯楽の存在があった。そんな役どころをこなしているうちに、いつしかメイバーンもが主役の座を手中に取めたのだからジャズマンの人生は面白い。エリックがメイバーンを非常に頼りにしていることは、エリック・カルテットの来日ギグを見て理解できた。その時の模様は、『ザ・ライブ〜アット・ザ・キーノート』(VAM)でアルバム化されているので、未聴の方にはぜひお勧めしたい。教え子がプロの世界に入ってから好まし

- ## Don't Know Why

ドント・ノー・ホワイ

Harold Mabern Trio

ハロルド・メイバーン・トリオ

 - エドワード・リー
Edward Lee 〈 H. Mabern 〉 (6 : 19)
 - ダンス・ウィズ・ミー
Dance With Me 〈 P. Brown- R. Dans 〉 (6 : 38)
 - マイ・フェバリット・シングス
My Favorite Things 〈 R. Rodgers 〉 (5 : 18)
 - ドント・ノー・ホワイ
Don't Know Why 〈 J. Harris 〉 (4 : 39)
 - ドリーミー
Dreamy 〈 E. Garner 〉 (6 : 27)
 - カブー
Cabu 〈 R. Alexander 〉 (6 : 11)
 - 飾りのついた四輪馬車
The Surrey With The Fringe On Top 〈 R. Rodgers 〉 (6 : 16)
 - ナイトライフ・イン・トーキョー
Nightlife In Tokyo 〈 H. Mabern 〉 (6 : 09)
 - ブルース・フォー・デヴィッド
Blues For David 〈 B. Montgomery 〉 (5 : 00)
 - マイ・シャイニング・アワー
My Shining Hour 〈 H. Arlen 〉 (4 : 33)

<p>ハロルド・メイバーン Harold Mabern 〈 piano 〉</p> <p>ナット・リーブス Nat Reeves 〈 bass 〉</p> <p>ジョー・ファンズワーズ Joe Farnsworth 〈 drums 〉</p> <p>録音：2003年4月6日　アヴァター・スタジオ、ニューヨーク</p> <p style="text-align:center">＊</p> <p>Produced by Tetsuo Hara and Todd Barkan. Recorded at "Avatar Studio" in New York on April 6 , 2003. Engineered by Jim Anderson , Technical Coordinator by Derek Kwan. Mixed and Mastered by Venus 24bit Hyper Magnum Sound : Shuji Kitamura and Tetsuo Hara. Front Cover Photo : © Jeanloup Sieff / G. I. P. Tokyo. Artist Photos : John Abbott. Designed by Taz.</p>
<p>© 2003 Venus Records, Inc. Manufactured by Venus Records, Inc., Tokyo, Japan.</p>



いパートナーシップを築いている例としては、ゲイリー・パートンと小曾根真のコラボレーションが有名だが、レギュラー・バンドで活動している点で、メイバーンとエリックの関係は特別なものと言べきだろう。

91年のセロニアス・モンク・コンペで第2位に輝いたエリックは、米Delmarkからリーダー作を重ねたが、日本のレコード会社が育ててきたことは厳然たる事実だ。しかし2000年になって、米大手ジャズ・レーベルのMilestone がエリックとの契約第1弾『ザ・ファースト・マイルストーン』を発表。ようやくエリックがワールドワイドに活動する環境が整備された。さらに『ザ・セカンド・マイルストーン』『サミット・ミーティング』、そして最新作『ナイトライフ・イン・トーキョー』と、年に1作の割合でコンスタントにリーダー作を発表しており、それらすべてにメイバーンが協力しているのも2人の絆の深さを物語っている。

メイバーンはヴィーナス第1弾『恋に恋して』で、ジョージ・ムラーツ+ジョー・ファンズワースとのトリオを編成。同第2弾『キス・オブ・ファイヤー』ではベースがナット・リーブスに交代し、4曲でエリックをゲストに迎えた。同作から1年4か月後の録音となった本アルバムは、前作と同じトリオによるニューヨーク録音である。本稿の冒頭で触れたタイトル・ナンバー以外は、スタンダード、ジャズ・ナンバー、メイバーンのオリジナル2曲で構成されている。

■エドワード・リー

92年録音のデュオ作『フィラデルフィア・バウンド』(Sackville)でも演奏しているメイバーンのオリジナル。70年代のハードバップ・リバイバルで第一線に復帰した多くのベテラン・ピアニストが新たな魅力をアピールしてファンを獲得した。有名曲を想起させるこのナンバーに、同様の香りが感じられる。

■ダンス・ウィズ・ミー

オープニング・ナンバーで発したテンションを、この2曲目でもキープしている。まるで60年代のラムゼイ・ルイス・トリオのような、熱気溢れるファンキー・サウンドは、一瞬このアルバムが2003年に吹き込まれたことを忘れさせる。楽曲の裏テーマはジャズ・メッセンジャーズの「モーニン」かも。

■マイ・フェバリット・シングス

引き続きアップ・テンポで臨んだということで、メイバーンの気概を感じる。2分過ぎにピアノ独奏に移ってムードを変えて、再びピアノ主導のトリオ演奏へ移行。この曲に関してはジョン・コルトレーンを抜きには語れないのだが、メイバーンのアプローチはむしろマイベースの自己表現だ。

■ドント・ノー・ホワイ

ちょっと崩した感じの右手のテーマ・ステイトメントは、さながらニューオリンズのクラブでのパフォーマンスといった趣。ノラ・ジョーンズはレイド・バック&アンニュイなヴォーカルが世界中で支持されたわけだが、メイバーンはそんなことはお構いなしに、ファンキーなナンバーに仕立てている。

■ドリーミー

「ミスティ」を想起させる導入部のこの曲は、エロール・ガーナーのオリジナル。タイトル通り夢見る少女のような曲調の6分超。サラ・ヴォーンやシャーリー・ホーンといった女性ヴォーカリストがカバーしているこの曲の、ピアノ・トリオ・ヴァージョンは珍しい。メイバーンのガーナーに対する愛情が色濃く反映されている。

■カブー

メイバーンが敬愛するフィニアス・ニューボーンJr.が『ア・ワールド・オブ・ピアノ』で取り上げたローランド・アレキサンダーのナンバー。ピアノとドラムスの4バースを含むバビッシュな曲調が痛快だ。このあたりのメイバーンの曲処理能力は、さすがと言うしかない。

■飾りのついた四輪馬車

この曲を演奏するにあたって、メイバーンはジョン・コルトレーン・ヴァージョンを思い浮かべたのだろうか。ピアノ・トリオには日常的でないこの曲を採用すると決めた時点で、特別な思いがあったに違いない。後半は通常の4バースへと流れて、ハードバビッシュに仕上げている。

■ナイトライフ・イン・トーキョー

前述通り、エリックの最新作のタイトル・ナンバーが実はメイバーンのオリジナルだった、というわけ。メイバーンのモーダルなアプローチは、マッコイ・タイナーのプレイに重なる。ここでもメイバーンは全力投球だ。バンドの結束を高めるため、との意図も感じられる。

■ブルース・フォー・デヴィッド

パディ・モンゴメリーのオリジナル。パディは日本ではほとんど無名だが、モンゴメリー3兄弟の末弟というポジションにもかかわらず、識者の間では隠れた実力者との評価は築いていた。その意味でメイバーンが本作でこの曲を採用したことは喜ばしい。

■マイ・シャイニング・アワー

アルバムの最後を飾るこの曲でも、アップテンポを貫いている。そしてラストにはドラマー、ファンズワースのソロをフィーチャー。3人の息の合ったプレイが堪能できる。
2003.6.16
杉田宏樹